

五旬節の日に、主イエスの弟子たち、およそ百二十人ほどが聖霊に満たされて、世界のさまざまな国の言葉で福音宣教を始めた。このことを説明して、十二使徒の代表としてペトロが、この出来事は預言者ヨエルが言っていた“神が聖霊を注がれる”という聖霊注ぎの実現であることを21節までで説明した。

そして、そのこと的前提となる二つのこと、主イエスの「復活」と、主イエスが神の「右に挙げられた」高举、これを論証し始める。そのうちの主イエスの復活の論証は、22節から32節までで、33節から36節までは、復活した主イエスが「神の右に上げられ」て「聖霊を御父から受けて注いでくださった」という、主イエスの高举と聖霊の注ぎを論じている。

24節に「しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました」とあるが、これと同じ文章が32節に「神はこのイエスを復活させられたのです」と繰り返されている。この間に、ダビデの詩編を用いて聖書の解釈をしながら主イエスの復活を論証する議論が繰り返される。

ペトロが語っているところは、まず25-28節までに、詩編16編8節から11節までを引用し紹介する。その次に、29節から31節までにおいて、その聖書を解説して適用する言葉が続く。そして最後に、32節が結論となっている。

25-28節.

「ダビデは、イエスについてこう言っています。『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれない。あなたは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』」

詩編16編8-11節のギリシア語訳からの引用。この詩編は、伝統的にはダビデが、まだ王位に就く前に、ダビデの人気を妬むイスラエルの王サウルに命を狙われて、少数の部下と共にイスラエルの内外を放浪していた時代に詠ったものだと言われている。ダビデは、命を狙われる危険のなかでも、神に信頼することから平安が生まれるということ、続いて、神の交わりの中にある人は、もはや死の力に支配されないということを詠っている。

ペトロは、この詩はダビデ自身のことを詠ったというよりも、むしろ主イエスの復活のことを預言したものとして引用している。その一つの理由は、29節にあるように、ダビデはサウロ王によって殺されはしなかったが、年老いて死に、墓に葬られ、ダビデ自身は死の力に勝つことは出来なかったからである。もう一つの理由は、30-31節にあるように、ダビデは預言者としての能力も持っていたので、自分の子孫である主イエ

スが死に勝ち永遠の王座に座することを知っていたからだ、ということである。これらの理由をもって、ダビデの死は、実はイエス・キリストの復活の預言に他ならなかったという。

29節.

「兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあり、はっきり言えます。」

ここで改めて「兄弟たち」と呼びかける。これは、聖書の引用が終わり、これから解説に移るという区切りの言葉。内容としては、ダビデは、その体は朽ち果ててしまったということ。今日、「**ダビデの墓**」（ネヘミヤ 3:16）と呼ばれるものが、エルサレムの南の方、シロアムの近くにあるが、これが史実であるかどうかは分からない。ペトロと同じ頃に生きたユダヤ人の歴史家ヨセフスは、ダビデの墓はエルサレムにあったと伝えている。

いずれにしても、上記のように、ダビデ自身は、詩編 16 編で詠われているものとは違って、その死体は朽ち果てた。つまり、ダビデは詩編で自分のことを語ったものではないということ、ペトロは言いたいのである。

30節.

「ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。」

ダビデが自分のことを詠ったのでなければ誰のことを詠ったのかということ、それはダビデの子孫として生まれてくるメシアのことを預言しているのだと、ペトロは言いたい。

ダビデは、29 節では「先祖ダビデ」と言われている。「先祖」と訳されている言葉（*πατριάρχης*、パトリアルケース）は、普通は、「族長」（「族長アブラハム」のような）などと訳されている言葉である。その家系の一番元祖を表す言葉である。

それだけではなく、ここでは「預言者」とも言われている。この先の 4 章 25 節には「あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました」と詩編 2 編の引用がある。それと同じ、16 編を詠ったダビデは、「聖霊によって」「預言」をさせられていた器なのだ、ペトロは言う。

神がダビデに誓ってくださったこととは、旧約聖書サムエル記下 7 章 12 節から 14 節 a にある預言者ナタンを通して神様がダビデに約束された約束のこと。

「あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえに堅く据える。わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」

ルカによる福音書のクリスマス物語で、天使ガブリエルはマリアに「その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる」（1 章 32 節）とある。

3 1 節.

「そして、キリストの復活について前もって知り、『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない』と語りました。」

ダビデが詩編 16 編で「わたしは」と言っているのは、実はそのメシアに成り代わって代弁していたのだと、ペトロは言う。そこで、先ほどの 27 節に一度引用した詩編 16 編 10 節をもう一回引用し直すに当たって、言い換えをしている。それは、27 節では「**あなたの聖なる者を**」とあったのを、「**その体を**」(ἡ σὰρξ、ヘー サルクス、【NKJV】His flesh)と言い換えたこと。これにより、主イエスが十字架上で死に墓に葬られたが、その体は朽ち果てることがない、ということ詩編の引用を通して語る。

3 2 節.

「神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。」

新共同訳では 23 節でも 24 節でも「イエス」という人名を挙げているが、原文ではただ「彼を」とか「これを」と受け止めるだけ。32 節になって初めて、22 節で最初「**ナザレのイエス**」と言ったのを受けて、「このイエスを」「**神は復活させられたのです**」という。ペトロの結論から分かるのは、主イエスは決して、復活したからメシアになったのではない。そのずっと前からメシアであり、千年も前からそれは預言されていたことであって、だから他の人に先駆けて彼だけは「復活させられた」のである。「**その体は朽ち果てることがない**」のである。

次の 33 節から 36 節において、ペトロは、主イエスの高举と聖霊の注ぎという事実を断言し (33 節)、詩編 110 編を語ることを通してそれを論証する (34-35 節)。そして最後の 36 節で、今までの二つ、復活と高举から引き出される結論を語る。

3 3 節.

「それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。」

「それで、それゆえに」という接続詞で続けられている。つまり、主イエスが身体が朽ち果てることなく復活されたという「復活」は、ただそれだけで独立している出来事ではなくて、「それゆえに、神の右に上げられる」高举に直結している出来事なのである。

主イエスの昇天は、弟子たちが見送った体験である (1:9-11) が、「神の右に上げられた」ということは誰も見たことがない。これは、ただ聖書の教え (この後に引用されている詩編 110 編) に従ってそう信じてるだけである。

「神の右に上げられた」復活の主イエスは、「約束された聖霊を御父から受けて注いでくださった」。ペトロは五旬節の聖霊降臨の出来事をこのように語る。主イエスは、ルカ 24 章 49 節において「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る (遣わす)」と「約束」しておられた。

34-35節.

「ダビデは天に昇りませんでした、彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするときまで。」』」

詩編 110 編 1 節からの引用。この個所を引用しながら、この「神の右」の座に着いておられるという主イエスの高挙を説明する。

「主は、わたしの主にお告げになった」。最初の「主」とは、「主なる神(ヤハウェ)」であり、「わたしの主」とは、ダビデ自身ではなく別の人のことなので、その「わたしの主」とは、主イエスのことであるとペトロは語る。

この同じ詩編を主イエスはルカによる福音書 20 章 41 節から 44 節までにおいて、御自身に引き合いに出されて、「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』というのか」といって、むしろ「神の子」でもあるのではないかということ議論された。だから、ペトロも、この「わたしの主」と呼んでいるのはダビデでもなければダビデ王朝の普通の王でもなく、神の子メシアのことだ、と言っている。

「わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするときまで。」

この言葉は、結局、メシア(主イエス)の戦いを神御自身も御自分の戦いとして戦って、そして必ずメシアを勝利に導く、敵を屈服させる、こういう約束をしておられる言葉である。つまり、神の右腕となられたイエス・キリストと神様とが一体となって、神の御国の完成を達成される。これが「神の右に座す」ということの究極的な働きである。

36節.

「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

イエスを神が「主と」されているということは、詩編 110 編の「わたしの主」という呼び方からも、また神御自身の「右の座に着け」られて神と一つになって戦いを進めるという内容から言っても、はっきり分かることは、神はイエスを「主とし、またメシアとなさった」こと。31 節で「キリスト」と訳されているのも、ここで「メシア」と訳されているのも原文ではただ一つ「クリストス」。

神がイエスを「主とし、またキリストとなさった」ということを、十分には知らなかった。だから、十字架につけて殺した。でもそのイエスが復活し神の右に上げられて聖霊を注がれたという事実が皆の前で起こった時、「それゆえに、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません」。もう言い逃れることはできない。ペンテコステ(聖霊降臨)の出来事はそういう出来事である。

*次週(11月3日)が、休日のため、聖書研究祈祷会はお休みにします。